（別紙２）　　論文審査の結果の要旨

氏名　大塚達朗

この論文は、縄紋時代草創期と、後期～晩期と呼ばれる縄紋時代の初期と末期について、その土器が、どのような形・紋様・製作技法の集合体として存在するかを解明し、その属性の示す法則性の把握から、土器情報の伝達・交換を考察し、さらには縄紋時代社会のありかたそのものの再考に至る極度に専門的な論文である。

縄紋土器は縄紋文化研究のもっとも大きな資料であるが、大塚氏ほどこの対象に対し、精密かつ分析的に取り組んだ人はいないであろう。土器を見るにあたって、土器は人が作ったものであるから、当然個々に多少の違いがあるのが当然だという常識的発想は、専門家の間にも見られるが、氏は土器相互の厳密な比較によって、一本の線の有無、その曲がり方にいたるまで、それを採用させる共通の約束ごとがあり、紋様の変化はその約束事自体の変化にしたがったことを示す。そしてその約束ごとは、関東と東北といった遠距離地域にまで相互に乗り入れることが明かにされる。そればかりか相互の乗り入れのために、たとえば関東の土器の中に東北の土器要素を受け入れる構造が用意され、そこに両地域の土器要素をあわせもつキメラが生れる。このキメラこそが氏の研究のキーワードであり、２地域間の土器の時間的関係、各地域の土器の純粋な要素の抽出のための定点となる。

草創期の土器に対し、氏は従来の諸研究の方法を批判する。すなわち共伴したらしい石器に依存する土器の年代的位置づけ、紋様の変化に単純な一方向性を想定した順序づけ、あるいは恣意的に起源地を想定しそこからの伝播と伝播過程での変化で説明するような従来の考え方を批判し、地域ごとの土器のあくまで具体的な変化の過程と遠隔地間でおきた相互の乗り入れ関係の把握による独自の編年を示す。そして隆起線紋土器という草創期の大きな土器のブロック自体が、先行する２群の土器のキメラとして成立したと論ずる。

後期・晩期についてはじめにとりあげられるのが、橿原式土器紋様である。これは近畿地方を中心に縄紋時代の末期に流行したと考えられてきた紋様であるが、これまで、弥生前期の類似の紋様に変化する、縄紋と弥生をつなぐ紋様であると論じられてきた。しかし大塚氏は、近畿地方土器編年を厳密に再検討すると、この紋様が弥生時代の直前まで続かず、弥生時代の類似の紋様になるという議論の時間的前提自体がなりたたないことを示すと同時に、むしろ後期末晩期初頭という限られた時期に関東・東北地方に広がる、一見別種とも見える紋様と密接な関連をもって生起したことを示す。

大塚氏は、このように論じてきた土器の多系統観をもって、縄紋文化全体に論を及ぼし、縄紋文化を一つの系統としてとらえるのは誤りである、それは多くの系統の集合体にすぎないと論断する。突っ込みのたりない諸種資料の分析を繋ぎ合わせて縄紋文化の全体観と称する立論が普通である現在の学界において、大塚氏の、一種類の資料分析を徹底的に深めたうえでの縄紋文化観の提示は大いに意義のあるものと認められる。しかし土器は文化の一要素にすぎない。土器をもって文化と呼びなおすには、それが妥当であることが広い視野から論証され一定の支持を得なければならない。そもそも地方の土器系統どうしが相互に受け入れ可能な開かれたシステムを保持し続けたという大塚氏の結論こそが、縄紋文化に小部分を超えた大きな一体性があることの証拠ではないのだろうか。この点で大塚氏の最後の結論には疑問を表明せざるをえない。しかしながら本研究は９９パーセント土器の研究であるから、最後の１パーセントにおいて、自己の研究を重視するあまり過度の主張があったとしても本研究の価値が大きくそこなわれることはない。むしろ徹底的に精密な研究が、一転、大きな視野を開くことを示したことにおいて、土器研究に新たな地平を開いたものであり、博士（文学）の学位に値すると認められる。